

渡辺一夫 評論選

狂気について

他二十三篇

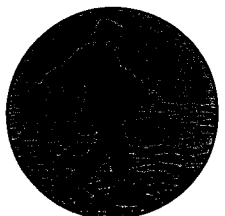
大江健三郎 清水 徹 編



暴力に対する嫌悪，人間の機械化に対する嫌悪，そして人間に対する愛を心に抱いて生きること——ユマニズムを生涯の思想とした著者（1901 - 75）の静かな祈願のことばは，読む者の胸に深い感動を呼び覚ます。真の知性の眼をもって

人間性の根源を洞察するエッセイ・評論23篇を収録。

（解題 = 清水 徹，解説 = 大江健三郎）



青 188-2
岩波文庫

渡辺一夫
評論選

狂気について 他二十三篇

大江健三郎
清水 徹 編

青 188-2

岩波文庫

570



9784003318829



1910195005706

ISBN4-00-331882-

C0195 P570E

定価 570 円（本体 553 円）



トランス
寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容になるべきか

Dans cet état de langueur où l'homme doit être entraîné par
le cours des choses, il n'aura peut-être d'autre ressource que
celle d'un déluge qui replonge tout dans l'ignorance.

— Senac de Meilhan —

右のような長い題目を、実際に与えられたわけではないが、註文の趣旨のなかには、右のような題目によって表現されてしかるべき主題があったと信じたから、敢て、このような標題にしたのである。

過去の歴史を見ても、我々の周囲に展開される現実を眺めても、寛容が自らを守るために、不寛容を打倒すると称して、不寛容になった実例をしばしば見出すことができる。しかし、それだからと言って、寛容は、自らを守るために不寛容に対して不寛容になってよいというはずはない。割り切れない、有限な人間として、切羽つまった場合に際し、いかなる寛容人といえども不寛容に対して不寛容にならざるを得ぬようなことがあるであろう。これは、認める。しかし、このような場合は、実に情ない悲しい結末であって、これを原則として是認

肯定する気持は僕にないのである。その上、不寛容に報いるに不寛容を以てした結果、双方の人間が、逆上し、狂乱して、避けられたかもしれぬ犠牲をも避けられぬことになったり、更にまた、怨恨と猜疑とが双方の人間の心に深い褶ひだを残して、対立の激化を長引かせたりすることになるのを、僕は、考えまいとしても考えざるを得ない。従って、僕の結論は、極めて簡単である。寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容たるべきでない、と。繰返して言うが、この場合も、先に記した通り、悲しいまた呪わしい人間の事実として、寛容が不寛容に対して不寛容になった例が幾多あることを、また今後もあるであろうことをも、覚悟はしている。しかし、それは確かにいけないことであり、我々が皆で、こうした悲しく呪わしい人間の事実の発生を阻止するように全力を尽さねばならぬし、こうした事実を論理的にでも否定する人々の数を、一人でも増加せしめねばならぬと思う心には変りがない。

人間は進歩するものかどうかは、むづかしい問題であろうが、人間社会全体の存続のために、人々が様々な掟や契約を作り出し、各自の恣意による対立抗争の解決に努力している点では、確かに進歩があると言ってもよいであろう。ヨーロッパの昔中世前期においては、個人間に悶着が起った時には、大名なり王者なりの前で、当該係争者が決闘をして、勝った者が神の意に適ったものとして、正しいと判ぜられたという。これは、弱肉強食から、人間が一步前進して、**何かの掟**、**何らかの契約**を求めて、弱肉強食を浄化する意志を持っている

証拠のように思われる。その後様々な法令が作られて、個人間の争闘は、法の名によって解決され、人間は死闘の悲惨から徐々に脱却しつつあると言ってもよいであろう。人間は嘘をつき、逆上して殺人もする。しかし、嘘をついたり、殺人をしたりしてはいけないという契約は、いつの間にか、我々のものになっており、嘘をつく人や殺人犯人は、現実にはいることを、悲しく呪わしい人間的事実として認めても、これを当然の事実として認める人はいないはずである。

寛容が不寛容に対して不寛容になってはならぬ、という原則も、その意味で、強く深く人々の心のなかに、**新しい契約として獲得されねばならない**。たとえ、前にのべたような悲しく呪わしい人間的事実が依然として起るとしても。いくらこうした原則が設けられても、不寛容が横行する以上どうにもならぬではないか、とも言われよう。しかし、右のような契約が、ほんとうに人間の倫理として、しっかりと守られてゆくに従い、不寛容も必ず薄れてゆくものであり、全く跡を断つことは、これまた人間的事実として、ないとしても、その力は著しく衰えるだろうと僕は思っている。あたかも嘘言や殺人が、現在においては、日蔭者になっているのと同じように。

○寛容と不寛容との問題は、理性とか知性とか人間性とかいうものを、お互いに想定できる

人間同士の間のことであって、**猛獣対人間の場合や、有毒菌対人間の場合や、天災対人間の場合**は、**論外**とすべきであろう。人間のなかには、**猛獣的な人間もいるし、有毒菌的天災的な人物もいるにしても、普通人である限りにおいては、当然問題の範囲内にはいつてくる**。ただ、このような人間は、その発作が病理学的な場合もあり無智の結果である場合もあるから、問題の範囲内に入れるとしても、これも別に論じなければならぬことになる。ここでは、概念的すぎるかもしれないが、**普通の人間における不寛容と寛容との問題だけに焦点の位置を限らねばならない**。

狂人も確かに人間ではあるが、狂人が暴れ騒ぐ時には、普通人は非常に困却するが故に、若干の力を用いたり、薬物の力を藉りたりして、その暴行を抑制することがある。もちろん、狂人に対して非人間的な取扱いを決してしないというむづかしい条件の下に、こうした措置は、万人に認容されるであろう。もっとも、普通人と狂人との差は、甚だ微妙であるが、普通人というのは、自らがいつ何時狂人になるかも判らないと反省できる人々のことにする。寛容と不寛容との問題も、こうした意味における普通人間の場に置いて、まず考えられねばならない。

秩序は守られねばならず、秩序を紊す人々に対しては、社会的な制裁を当然加えてしかる

べきであろう。しかし、その制裁は、あくまでも人間的でなければならぬし、秩序の必要を納得させるような結果を持つ制裁でなければならぬ。更にまた、これは忘れられ易い重大なことだと思ふが、既成秩序の維持に当る人々、現存秩序から安寧と福祉とを与えられている人々は、その秩序を紊す人々に制裁を加える権利を持つとともに、自らが恩恵を受けている秩序が果して永劫に正しいものか、動脈硬化に陥ることはないものかどうかということに深く考え、秩序を紊す人々のなかには、既成秩序の欠陥を人一倍深く感じたり、その欠陥の犠牲になって苦しんでいる人々がいることを、十分に弁える義務を持つべきだろう。即ち、秩序を守ることが他人に要求する人々は、自らにとってありがたい秩序であればこそ、正にその改善と進展とを志さねばならぬはずである。寛容が、暴力らしいものを用いるかに見えるのは、右のような条件内においてのみであろう。しかし、この暴力らしいもの、即ち、自己修正を伴う他者への制裁は、果して暴力と言えるのであろうか？ 十字路の通行を円滑ならしめるための青信号赤信号は暴力でないし、戸籍簿も配給も暴力ではない。人間の恣意を制限して、社会全体の調和と進行とを求めるものは、契約的性格を持つが故に、暴力らしい面が仮にあるとしても、暴力とは言えない。そして、我々がこうした有用な契約に対して、暴力的なものを感じるのには、この契約の遵守を要求する個々の人間の無反省、傲慢あるいは機械性のためである。例えば、無闇やたらに法律を楯にとって弱い者をいじめめる人々、十字

路で人民をどなりつける警官などは、有用なるべき契約に暴力的なものを附加する人々と言ってもよい。こうした例は無数にある。用いる人間しだいで、いかに有用なものでも、有害となり、暴力的になるように思う。このことは、あらゆる人々によって、日常茶飯のうちで考えられていなければならぬことであろう。

寛容と不寛容とが相對峙した時、寛容は最悪の場合に、涙をふるって最低の暴力を用いることがあるかもしれぬのに対して、不寛容は、初めから終りまで、何の躊躇もなしに、暴力を用いるように思われる。今最悪の場合にと記したが、それ以外の時は、寛容の武器としては、ただ説得と自己反省しかないのである。従って、寛容は不寛容に対する時、常に無力であり、敗れ去るものであるが、それはあたかもジャングルのなかで人間が猛獣に喰われるのと同じことかもしれない。ただ違うところは、猛獣に対して人間は説得の道が皆無であるのに反し、不寛容な人々に対しては、説得のチャンスが皆無ではないということである。そこに若干の光明もある。

人間の歴史は、一見不寛容によって推進されているようにも思う。しかし、たとえ無力なものであり、敗れ去るにしても、犠牲をなるべく少くしようとし、推進力の一つとしての不寛容の暴走の制動機となろうとする寛容は、過去の歴史のなかでも、決してないほうがよか

ったものではなかったはずである。

今でこそ尖锐な思想対立の圏外に置かれ、個人の内心の清らかさとやさしさを支えるものにもなり、寛容を説くキリスト教にしても、ローマ時代やヨーロッパ中世・ルネサンス時代には、決して寛容なものではなかったようである。これは、例えば、J・B・ビュアリの『思想の自由の歴史』（森島恒雄氏訳、岩波新書）にも詳しく述べられている通りである。このキリスト教がいかにして初めは不寛容であり、しかも何のためにその不寛容が激化せしめられ、その後いかにして寛容なものになったかということ、私見ではあるが、以下に記したいと思う。

キリスト教は、その母胎たるユダヤ教と同じく、峻厳な一神教の理念にすぎりながら、多神教のローマ社会に、深い敵意と憎悪を抱き、キリスト教の哲学と倫理とを以てせねば、世界は救えないという若々しい自負に生きていたようである。その間には、経済的な問題、階級的な問題も絡まっていたことは言うまでもなからう。ところが、キリスト教の不寛容に対して、年をとったローマ社会は、極めて寛容な態度を持っていた。当時のキリスト教から言えば、瀆神は死に値することになるにも拘らず、ローマ社会では、瀆神は罰せられず、ティベリウス帝は、「もし神々が侮辱されたら、それは神々自身に始末させるがよい」と言った

くらいである。ところが、これほど寛容で、宗教を人間のものにしていたローマ社会も、弘まり始めたキリスト教に向っては、かなりの不寛容を示した時期があった。即ち、ドミティヤヌス帝トラヤヌス帝時代の政策がそうであり、いきり立ったキリスト教徒の殉教者列伝の第一頁が開かれるのであり、追いつめられたキリスト教の峻厳さは、凄愴の度を増して行くのである。そして、この性格は、その後のキリスト教に何世紀の間、深い傷痕を残すのである。

ところで、寛容なローマ社会が、なぜキリスト教に対して不寛容であり得たかというに、それは、ビュアリによれば、ローマ社会の寛容を脅すキリスト教の不寛容を抹殺して自らの寛容を保とうとしたからである。

しかし、ここに附言せねばならぬことは、ローマ社会の不寛容といえども、キリスト教の不寛容に及ばなかったということである。我々は多くのキリスト教文学——例えば『クオ・ヴァーデイス』や『ファビオラ』——によって、ローマ人の残忍さを教えられているが、ローマ社会は、キリスト教徒の徹底的抹殺を考えはしなかったらしいのである。「第三世紀には、キリスト教徒はなお禁ぜられてはいたものの、全く公然と寛容されていた。教会は大びらに組織された。宗教会議は何の干渉も受けることなく開かれた。ちょっととした局地的な弾圧が試みられたことはあったが、大きな迫害は、ただ一回あっただけである。……（中略）……キ

リスト教徒は後になって一大殉教神話を創作したけれども、**事実**は、この世紀全体を通じて犠牲者は多くなかったのである。多くの残虐行為が皇帝たちの行為にされているが、彼らの治下において、キリスト教会が完全な平和を楽しんでいたことを我々は知っている」と、ビュアリは記している。

その上、三一年三三三年における宗教寛容令は、ローマ社会にキリスト教の弘流を決定的にし、その結果、**ローマの寛容の代りに**気負い立ったキリスト教の**不寛容**が君臨するにいたった、とビュアリは説き、こうも言っている。「この重大な決断のおかげで、理性は鎖につなわれ、思想は奴隷化し、知識は少しも進歩しない一千年が始まった」と。

すぐれた古典学者J・B・ビュアリが、ローマ社会の肩を持つことは当然であるが、本来峻厳で、若さのために気負い立ったキリスト教を更に峻厳ならしめ、更にいきり立たせたものは、ローマ社会が、自らの寛容を守ろうとして、一時的で微温的なものであったとしても、不寛容な政策を取った結果であるように思えてならない。終始一貫ローマ社会は、キリスト教に対して寛容たるべきであった。相手に、自ら殉教者と名乗る口実を与えることは、極めて危険な、そして強力な武器を与える結果になるものである。

中世、十六世紀を通じて、**異端審判**や**宗教改革**をめぐる**宗教戦争**が、驚くほどの酷薄さを

発揮したが、この酷薄さは、春秋の筆法を借りれば、ローマの誤った不寛容によって鍛えられたものと言えるかもしれない。一切の不寛容は、自らの寛容を守るための不寛容でも、予想外の呪わしい結果を残すことを考えざるを得ない。

僕は、**ソヴィエット・ロシアの国内政策の酷薄さ**を様々な論考や著書によって教えられ、ロシアの人間化を切に願っている者だが、**こうまで酷薄**になってしまったのは、**革命以来**、**ロシアを取り巻き**、**ロシアを叩き潰そうとした周囲の国々の責任**にもなるのではないかしらと、時々思うことがある。**窮鼠が成長したら猛虎**になるかもしれないからである。追いつめられ続けた人間が、**どれほど猜疑心に駆られ**、**やさしい心根を失う**かは色々な例で教えられるからである。

キリスト教がヨーロッパの新秩序を引き受けた時、この秩序を紊しかねないものは異端と断ぜられたが、**異端に対する迫害の歴史**は、キリスト教殉教者列伝以上の「伝説」になるかもしれない。

しかし、不寛容なキリスト教も、**所詮人間のもの**となり、それ自体に含まれているすぐれた人間的愛情が伸び始め、**己の不寛容を愚劣と考えるような時期**が**いづれくる**のであるが、**その最初の時期は**、**ルネサンス期ではあるまいか?** **ルネサンス期は**、**苛酷な異端質問の例**

と酸鼻な宗教戦争との歴史である。新教徒と旧教徒が、同じキリストの名において、たとえその間経済的政治的な理由があろうとも、お互いに狂信的な不寛容振りを示した時期である。しかし、この時代に、異教的古代の遺産の発掘と、ヨーロッパの地平線の拡大とによって、キリスト教の内側から、寛容の精神を説く人々が輩出するようになっていく。これはキリスト教の持つ深い美質の故でもあろうが、ルネサンス期が人類の歴史に寄与した尊い贈物でもあるし、人間が存在する限り、無力らしい寛容は不寛容以上に根強いものがあることを物語るものと思っている。

ジャン・カルヴァンが、自らの弟子であるはずの「異端者」(ミシェル・セルヴェ(ミゲル・セルベト)を、一五五三年にほとんど謀殺に近いような手段に訴えて、やむを得ぬ策とは言え、火刑に処した時、同信の人々からも非難の声が挙げられたことは当然な結末であった。カルヴァンは、翌年二月二十四日に、『真の信仰を維持するための宣言』を発表して、「泣いて馬鹿を斬る」の要を弁じたのに対して、カルヴァンの同志である寛容なセバスチヤン・カステリオンは、『異端者論・これを迫害断罪すべきや否や』を発表して、異端者には教会内部の制裁は加えられてもいたし方ないが、現世の権力を用いて、逮捕したり死罪にしたりするのはいけないという考えを述べた。これは「異端の権利」の認知として、多くの史家(例えば、アンリ・オゼール、フェルディナン・ビュイソンなど)によって注目されていることで

ある。もちろん、当時にあつては、カステリオンは、カルヴァン派によって獅子身中の虫と断ぜられた。カルヴァン派の論客テオドル・ド・ベーズの反駁書『異端者は世俗の法官によって処罰されるべきこと』は、カステリオンに対する峻厳な回答となつたのである。しかし、カステリオンの存在は、少くとも僕から見て、不寛容な十六世紀の地下を流れる寛容精神の一噴出孔となるように思われるし、多くのものを約束するようにも考えられる。

やや下つて、宗教相剋の相がいよいよすさまじくなった十六世紀後半に、己の妻子が新教に改宗することを認め、円満な家庭を営みつつ、自らは温良な旧教徒としてフランス宰相の位にあつたミシエル・ド・ロピタルの次の言葉は、寛容精神の更に別な噴出孔とならないものだろうか？

「ルッター派とかユグノー派とか教皇派とかいふ徒党分派を表す呪わしい言葉はやめにし、キリスト教徒という名前をそのまま用いたい」(一五六〇年一月二三日オルレヤン三部会における演説中の一節)

良心は、力を以て左右することのできない性質のものであり、むしろ教化されねばならぬ。決してこれを抑圧したり侵犯したりしてはならぬ。従つて、もし信仰でも、それが強いられれば、それはもはや信仰ではない」(一五六一一年九月一日ポワッシー会談の開会の辞中の一節)

「良心は強い性質のものであり、むしろ教化されねばならぬ。決してこれを抑圧したり侵犯したりしてはならぬ。従つて、もし信仰でも、それが強いられれば、それはもはや信仰ではない」

しかし、ド・ロピタルの懸命な努力にも拘らず、彼の晩年には、恐ろしい聖バルトロメオの大虐殺の報を受けねばならなかったのである。ド・ロピタルのような態度は、ただうまく世渡りをするだけだと言つて咎められる。しかし、ミシエル・ド・ロピタルは、人間を救うはずの宗教が原因で人間同士が殺し合いをする愚劣を知っており、キリスト教の人間化を体得した最初の一人である。そして、自分も含めてあらゆる人間が、うまく世を渡れるようにと念願をしただけなのである。あらゆる人間がうまく世渡りができることを願うのがなぜいけないであろうか？ その上、「世渡り」などという変な句いのする言葉を、僕は、わざとここで使っていることも判つてほしい。ド・ロピタルのような態度に対して、狡猾とか卑怯とか曖昧とかいう罵声を加えられたが、それは見当違いである。彼は、周囲の人々よりも、一段と高いところにおり、別な次元を獲得していたにすぎないのである。

ミシエル・ド・ロピタルの友人としても知られているミシエル・ド・モンテーニュは、自分と異つた思想を持った相手を抹殺することは、むしろ、その思想を生かすことになるという秘密を知っていたことは、第一に指摘されてよからう。また、彼が「良い野蛮人」の概念を取りあげ(例えば『エッセー』第一卷第三十一章、第三卷第六章)、キリスト教万能思想に亀裂を加え、キリスト教の人間化と進展とに寄与したことも注目されねばならない。異教的なモンテーニュが、キリスト教に与えた反省のなかには、後年パスカルによって反駁されるものも

あつたにせよ、全体として、それまでのキリスト教に見られた酷薄さと狂信とを緩和させる道も含まれていたと言つてもよいのではあるまいか？ 異教的ローマ社会がキリスト教に対して犯した罪の責任は、異教的キリスト教徒モンテーニュによって解除されようとしたかも知れないのである。当時海外の植民地開拓が目的で出発したキリスト教徒が、偶像を崇拜する無智な土着民よりも、はるかに残忍であり、信義を重んぜず、倫理的にも劣る行為に出ているという報告は、宗教的相対観の発生を促し、心あるキリスト教徒に深い衝動を与えたはずである。キリストの神を信ぜぬ以上天国に行けないとすれば、海外の土民たちは、たとえばキリスト教徒よりもはるかに善良であり倫理的であつても、天国へ行けないことになるし、土民を欺き、あらゆる非行を働いたキリスト教徒は、贖罪符を買えば天国へ行ける可能性を持つることになる。純真なキリスト教徒の心に投げ入れられたこうした反省は、重大なものを含んでいる。

更にモンテーニュがキリスト教に寛容の心を眼醒ませたのは、その逞しい、懷疑主義の故であろう。例えば、次の有名な言葉はどうであろうか？

①「真理を求めて」狩り立て追い求めることが、正に我々の役目である。この役目を下手にまた不適當にやったら言訳けが立たなくなる。(真理を)捕えられないとしても、それは別問題だ。なぜなら、我々は真理を求め続けるように生れついているのだから。」(第三卷第八章)

こうした考え一般は、寛容精神の噴出孔のように思われてならないのである。モンテニユから見れば、不寛容こそ、人間の役目を下手に不適當に行うことに外ならず、言訳けが立たぬ行為なのである。

現在、特殊な地域は除き、いわゆる文明国では、いかなる宗教も不寛容ではないし、宗教の故に死闘は行われていない。別言すれば、宗教は人間の内心へ正しく置かれたからであるが、それは、無力らしくても必ずなければならぬ寛容精神の功德以外の何ものでもあるまい。

人間を対峙せしめる様々な口実・信念・思想があるわけであるが、そのいづれでも、寛容精神によって克服されないわけではない。そして、不寛容に報いるに不寛容を以てすることは、寛容の自殺であり、不寛容を肥大させるにすぎないのであるし、たとえ不寛容的暴力に圧倒されるかもしれない寛容も、個人の生命を乗り越えて、必ず人間とともに歩み続けるであろう、と僕は思っている。都留重人氏が『学問の自由を求めて』という傾聴すべき論考を発表しておられたが、そのなかで特に感銘の深かったのは、二人のアメリカ人の言葉である。一人は、最高裁判所判事のオリヴァー・ウェンデル・ホームズという人で、一九二九年に、ロジカ・シュウィンマー事件という裁判において、その判決文中に次のような文章を綴っているのである。

「我々と同じ意見を持つている者のための思想の自由ではなしに、我々の憎む思想のためにも自由を与えることが大事である。」(傍点は都留氏による)

もう一つは、これまた現在アメリカ最高裁判所判事ロバート・ジャクソンが、バーネット事件の折に下した判決文の一節である。

「反対意見を強制的に抹殺しようとする者は、間もなく、あらゆる異端者を抹殺せざるを得ない立場に立つこととなる。強制的に意見を劃一化することは、墓場における意見一致を勝ちとることではない。しかも異った意見を持つことの自由は、些細なことについてのみであってはならない。それだけなら、それは自由の影でしかない。自由の本質的テストは、現存制度の核心に触れるような事柄について異った意見を持ち得るかにかかっている。」(傍点は筆者)

僕は、この二人のアメリカ人の名前を一度も聞いたことがなく、特に著書をたくさん残して、思想界に寄与している人物かどうかとも知らない。僕にとって、この二人は、いわば「無名の人」の大群に属する。そして、このことは極めて僕を慰撫激励してくれる。即ち、寛容は、数人の英雄や有名人よりも、多くの平凡で温良な市民の味方であることを再び感じるからである。そして、寛容は寛容によってのみ護らるべきであり、決して不寛容によって護らるべきでないという気持を強められる。よしそのために個人の生命が不寛容によって奪われ

ることがあるとしても、寛容は結局は不寛容に勝つに違いないし、我々の生命は、そのために燃焼されてもやむを得ぬし、快いと思わねばなるまい。その上、寛容な人々の増加は、必ず不寛容の暴力の発作を薄め且つ柔らげるに違いない。不寛容によって寛容を守ろうとする態度は、むしろ相手の不寛容を更にけわしくするだけであると、僕は考えている。その点、僕は樂觀的である。ただ一つ心配なことは、手っとり早く、容易であり、壮烈であり、男らしいように見える不寛容のほうが、忍苦を要し、困難で、卑怯にも見え、女々しく思われる寛容よりも、はるかに魅力があり、「詩的」でもあり、生甲斐をも感じさせる場合も多いということである。あたかも戦争のほうが、平和よりも楽であると同じように。

だがしかし、僕は、人間の想像力と利害打算とを信ずる。人間が想像力を増し、更に高度な利害打算に長ずるようになれば、否応なしに、寛容のほうを選ぶようになるだろうとも思っている。僕は、ここでもわざと、利害打算という思わしくない言葉を用いる。

初めから結論がきまっていたのである。現実には不寛容が厳然として存在する。しかし、我々は、それを激化せしめぬように努力しなければならぬ。争うべからざることのために争ったということの後になって悟っても、その間に倒れた犠牲は生きかえってはこない。歴史の与える教訓は数々あろうが、我々人間が常に危険な獣であるが故に、それを反省し、

我々の作ったものの奴隷や機械にならぬように務めることにより、甫^はめて、人間の進展も幸福も、より少い犠牲によって勝ち取られるだろうということも考えられてよいはずである。歴史は繰返す、と言われる。だからこそ、我々は用心せねばならぬのである。しかし、歴史は繰返すと称して、聖バルトロメオの犠牲を何度も出すべきだと言う人があるならば、またそういう人々の数が多いのであるならば、僕は何も言いたくない。しかし、そんなはずはなからう。そんな愚劣なことはあるはずはなからう。また、そうあってはならぬのである。

(1951)